

担当 中野順治・堀内朝保

十二 応神天皇陵（大阪府羽曳野市菅田六丁目）の東側境界線土留設置

箇所調査

担当 中野順治・堀内朝保

十三 欽明天皇陵（奈良県高市郡明日香村大字平田）の拝所前崩壊復旧

工事箇所調査

担当 西村義輝

十四 狭木之寺間陵（奈良市山陵町）の堤防崩壊復旧箇所調査

担当 仲埜幸男

以上の調査は、事前調査は当部陵墓調査室員と、所管陵墓監区職員がこれを行ない、立会調査は、主として所管陵墓監区職員が陵墓調査室の指示に従って実施したが、重要な箇所については、陵墓調査室員と所管陵墓監区職員とでこれを行った。

工事の設計と実施は、以上の調査結果に従い京都事務所工務課がこれにあたった。

宣化天皇陵の調査については、考古学上の指導を末永雅雄書陵部委員にお願いし、又、調査を来見された網干善教関西大学教授・近藤義郎岡山大学教授・猪熊兼勝奈良国立文化財研究所室長等からも意見をうかがった。

開化天皇陵の調査には、末永雅雄書陵部委員に考古学上の指導を、梅田甲子郎奈良教育大学教授に地質学上の指導をそれぞれお願いした。又、

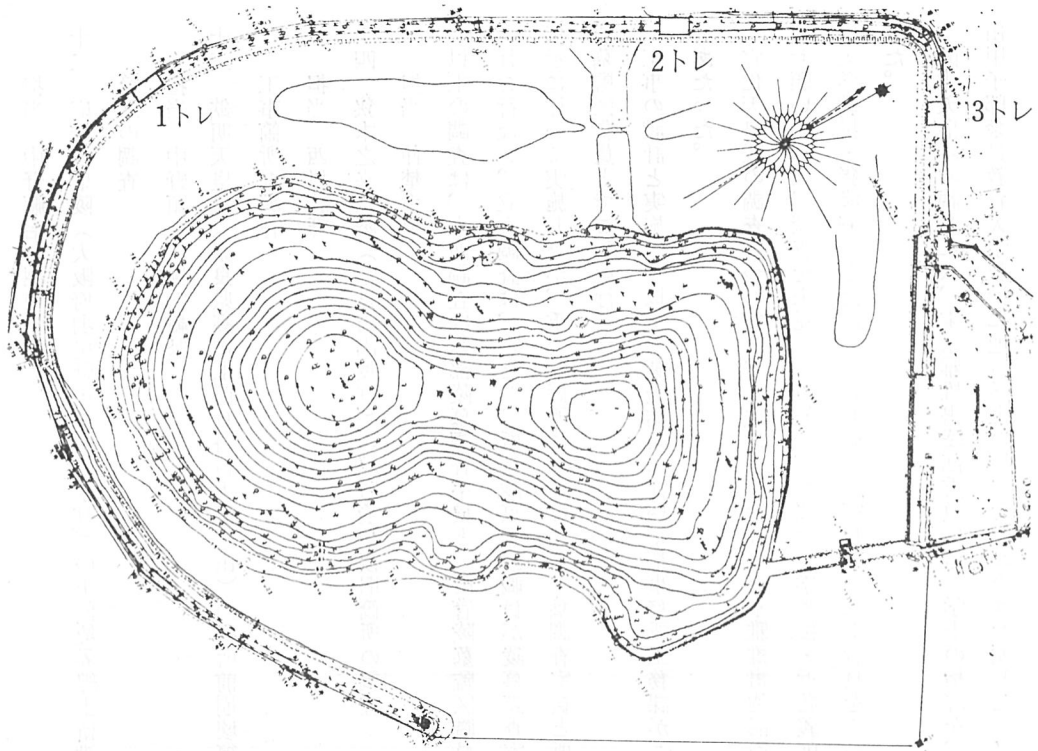
出土の遺構・遺物の処置については、奈良県教育委員会文化財保存課と連絡を取った。

これらの調査のうち、遺構・遺物を検出したものについて、以下その概要を記載する。
(陵墓調査室)

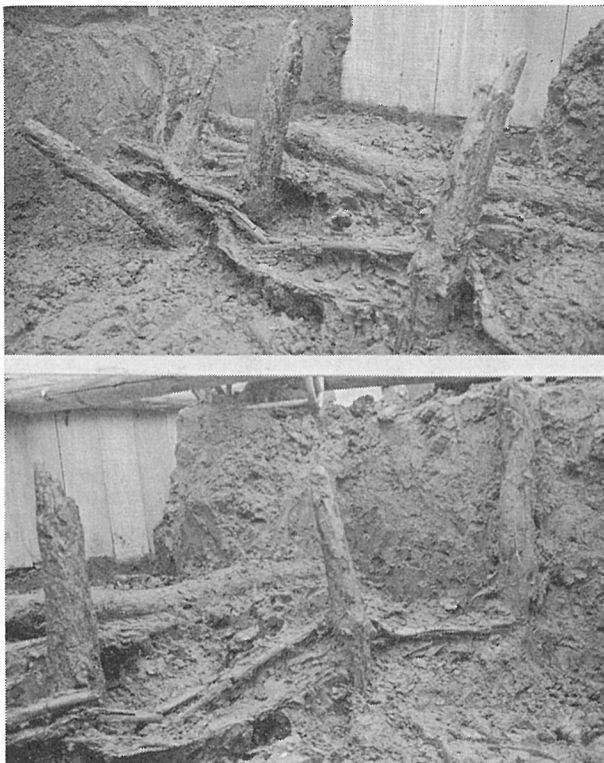
一 宣化天皇陵外堤漏水防止工事に伴う事前調査

宣化天皇と同皇后橘仲姫皇女が合葬された身狭桃花鳥坂上陵は、奈良県橿原市鳥屋町（旧高市郡畝傍町大字鳥屋字見三才・西浦・垣内）一、二七二番地にある。越智岡丘陵の北端に派出した一支丘の末端近くに位置し、丘尾を本陵の前方部前面と後円部背面とで切断し、支丘を利用して造営された前方後円墳である。この支丘を南にたどると、後円部後方には「船着山」と呼ばれる高まりがあつて、前方後円墳を含む小古墳群がある。その南は、「耕山古墳」と呼ばれる、畿内はもとより全国的にみても最大規模の方墳である倭彦命墓と連らなっている。西方には、小さな谷を隔てて約三〇〇基の新沢千塚古墳群があり、これらを含めた越智岡丘陵上の古墳の総数は、約六〇〇基にも達するという。

この陵は、長軸を北北東にとる二段築成の前方後円墳で、原形を損っているので正確を期し難いが、全長一三〇メートル、前方部巾七八メートル、同高一九・五メートル、後円部径八三メートル、同高一八・五メートルを計る。くびれ部の両側に造出しをもち、周塹が続っている。



第1図 宣化天皇陵トレンチ位置図 (1/1500)

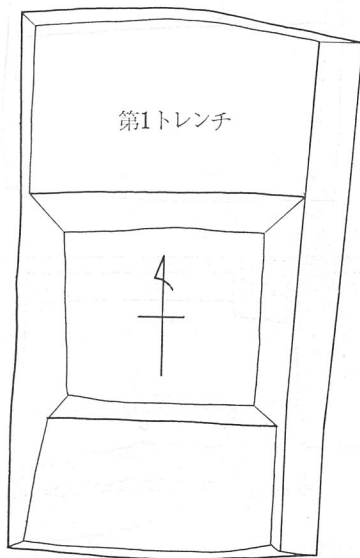
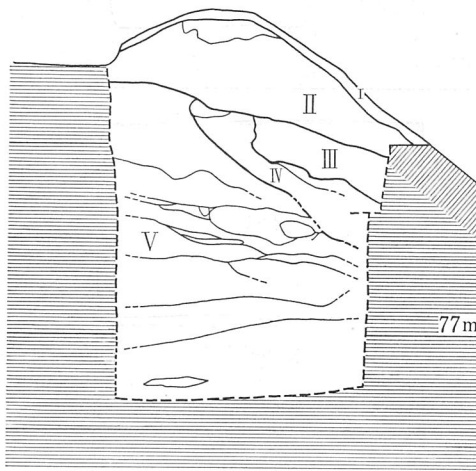


第2図 宣化天皇陵第2トレンチ竹しがりみ出土状況

西北側の市道に面する外堤法面から浸出する水が、遑水が外堤を透過して漏出している疑いもあるので、漏水防止工事を施すのに伴う事前の発掘調査を一〇月二六日から十一月二五日まで実施した。工法として、鋼矢板を間断なく打込む工法が最も有力な案として考えられたので、原初の遺構や地山が認められない限り、鋼矢板の深さ(五メートル)まで掘下げるべく、第1図に示す三カ所にトレンチを穿った。調査の結果、原初の遺構は認められなかったので、当初の計画どおり施工した。また工事中も立会ったが、異状は認められなかった。

第一および第三トレンチ（第3図、第4図2）は、全体的にみて前者が砂質の土で、後者が粘質である違いはあるが、おおむね外堤の築造ないし修補の過程に類似性が認められる。すなわち、第Ⅴ層を積上げた後、あたかも掘の浚渫土を法面に上げたようなⅣ層、さらにこのⅣ層の堀側の斜面を埋めて上部を平坦にしたⅢ層、最後に小土堤を盛上げたⅡ層からなっている。ただし、第一トレンチの第Ⅴ層は、地山の疑いが残っている。

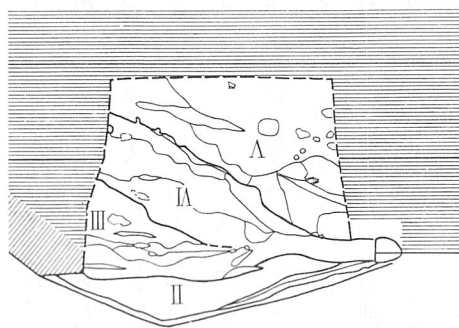
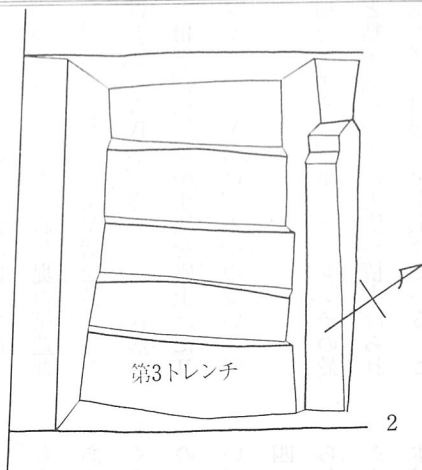
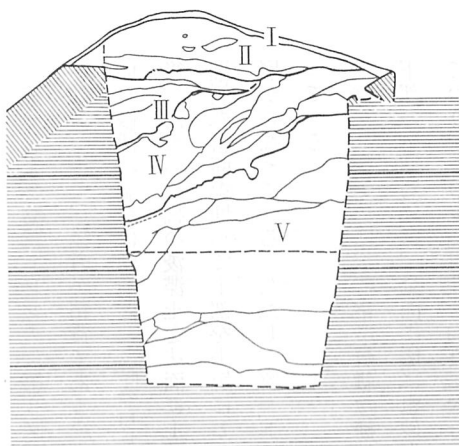
第二トレンチは、非常に複雑な様相を呈する。掘下げたトレンチの最下部の第Ⅶ層には、全面に俵に粗砂と粘土塊をつめた土俵が積上げられており、その上に粗砂を均質に含む粘土層（Ⅵ層）を盛上げている。この上の土層は、しがらみと密接な関係があり、しがらみから堀側の方は第Ⅵ層と同じ粘土層で有機質を含む土が続いているのに対し、しがらみから道路寄りすなわち西北側は、粗砂層と粘土層とが交互に繰返すよくしまった土で埋められ、さらに前者をも覆っている。しがらみは、二～三メートルの先の尖鋭な丸太杭を三〇～五〇センチメートルおきに打込み（その頭は、ほぼ海拔七七・四メ



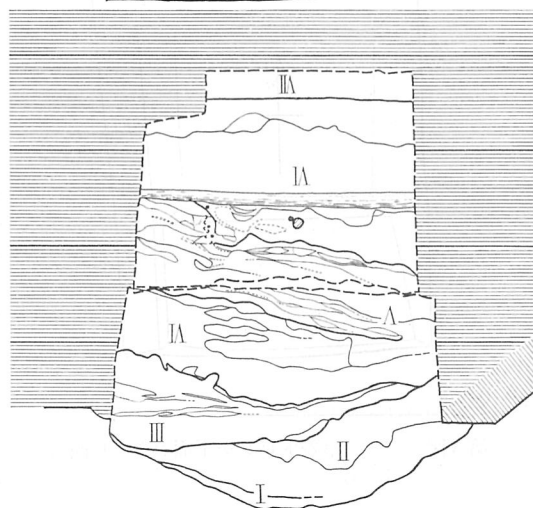
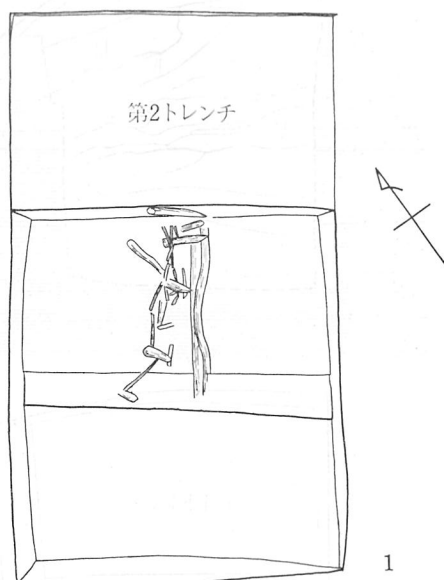
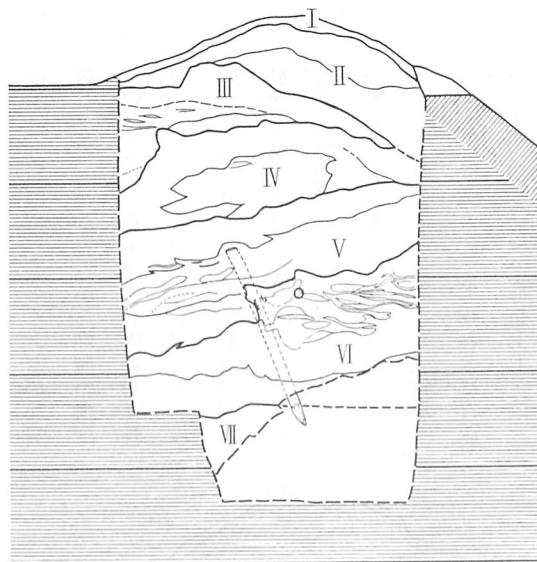
0 4m

第3図 宣化天皇陵トレンチ平面および断面 (1/80)

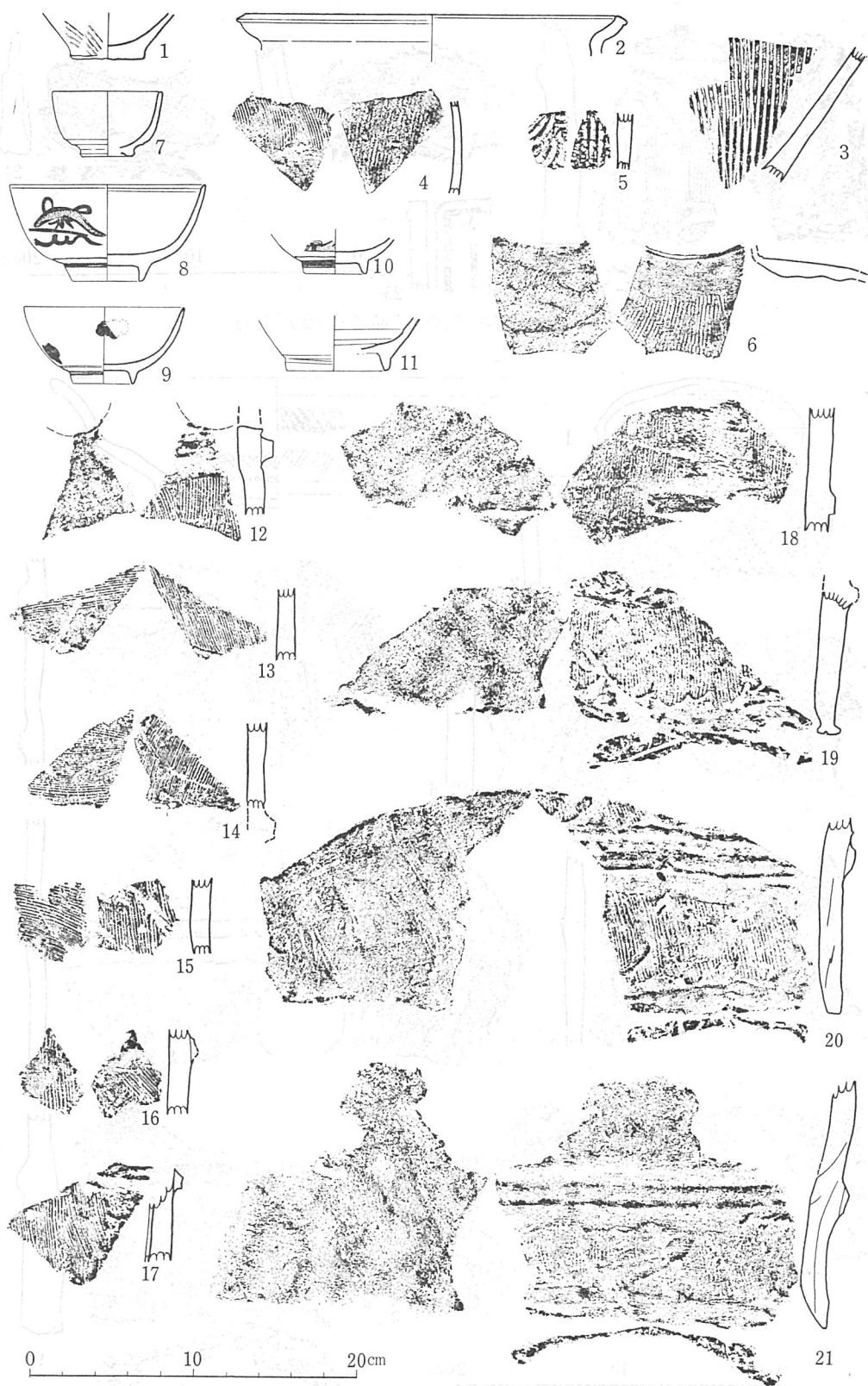
ートルのところでそろっており、先端部は、第Ⅶ層の土俵に達するものもある。）、堀側に胴木丸太を渡し、道路側に竹しがらみを組んだものである。これより上は、中心部のこぶし大以下の粘土塊を含んだ砂質土をくるむように、厚い粘土層を置いて堅くしめた第Ⅳ層があり、粘土羽金のようにみえる。さらに、道路際の方を砂質土で埋めた後、小土堤を築いている。以上のようにこのトレンチの地層は複雑で、現堤防天端より四メートルも下に土のうが検出され、胴木丸太をもつ竹しがらみが設けられており、この場所が築堤以前は、足場の悪い水場であったことが窺える。このことは、竹しがらみより堀側の部分の土中に多量の植物遺体、例えば松葉や菰類が含まれていたことから察せられる。この築堤



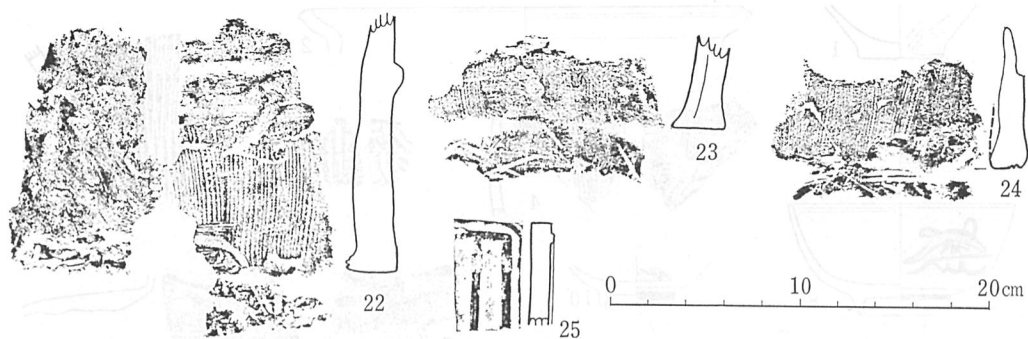
0 4 m



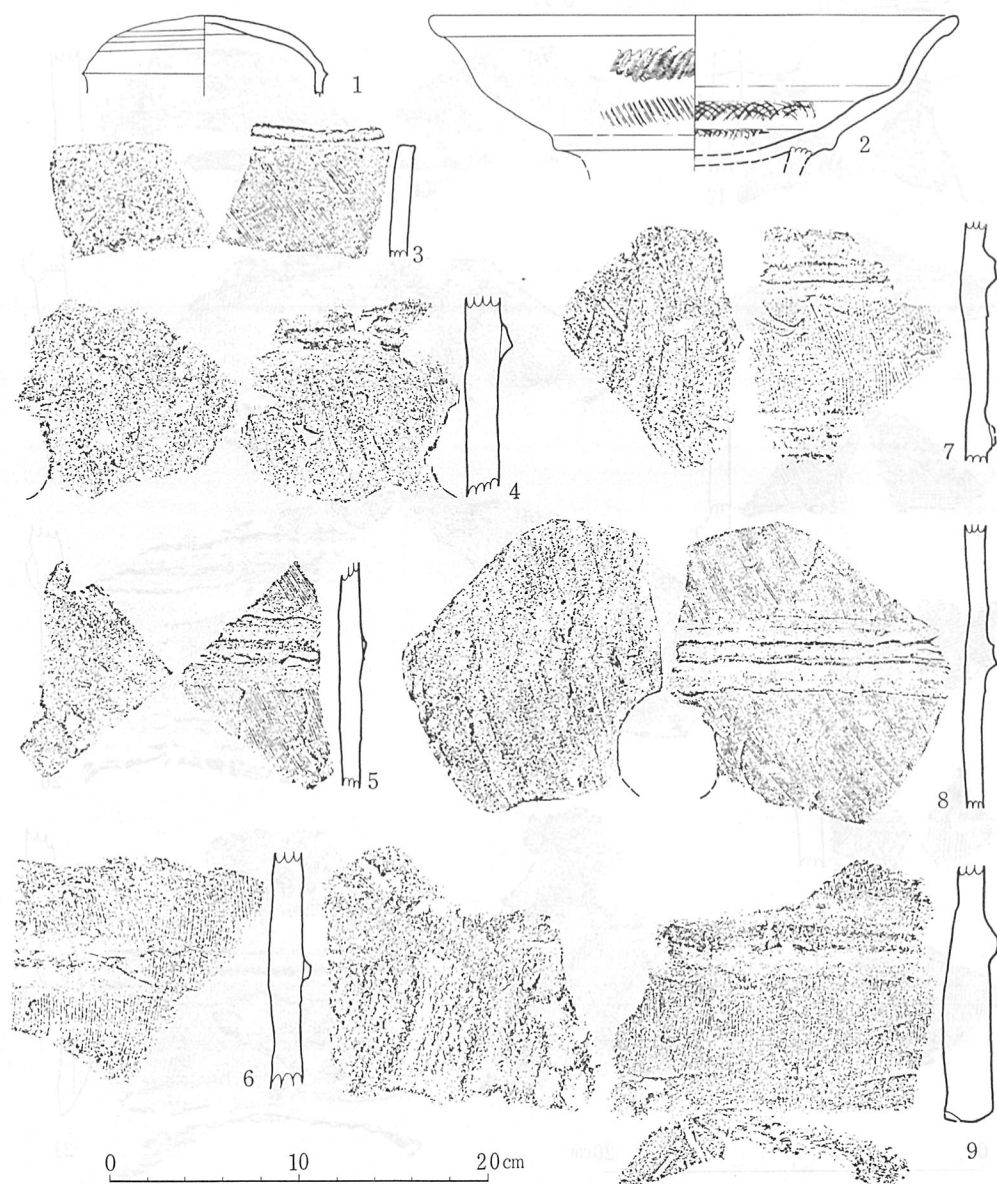
第4図 宣化天皇陵トレンチ平面
および断面 (1/80)



第5図 宣化天皇陵外堤の出土品（その1）(1/4)



第6図 宣化天皇陵外堤の出土品（その2）（1/4）



第7図 宣化天皇陵墳丘裾の出土品（1/4）

の時期は明らかにできなかった。

以上のように、保存すべき遺構は見出されず、発掘の範囲では、第一トレンチのIV層に疑問が残る以外、二次的な盛土と考えられ、遺物も、この盛土中から出土している。

土師器(第5図1・2) 甕の底部破片1は、外面に叩き目が認められ、底部中央がわずかに凹んでいる。弥生後期末のものかも知れない。

2は、中・近世の土鍋。外面に煤が付着。

炆器(第5図3) 摺鉢の破片3がある。

須恵器(第5図4・6) いずれも破片で全形をうかがえるものはないが、外面に叩き目を残し、6は広口壺かと思われる。

陶器(第5図7) ぐい飲み。近世初期の唐津焼き。

磁器(第5図8・11) 8・10は碗、11は徳利の底部で、いずれもくすんだコバルトの染付、上釉は青味があり、近世初期の伊万里焼き。

埴輪(第5図12・21、第6図22・24) いずれも小型の埴輪円筒。外面は縦または斜め方向のハケ目。基底部の端部近くは、横ナデ(19・22)。内面は指によるナデツケの上をナデて(12・18・22)、さらに横(13・14)斜(15)または縦(16)方向のハケ目を加える場合がある。突帯は貼付け突帯で、横ナデをきつく施す低平なもの。透穴は円形(12)。焼成は、黒班のない赤焼きが多いが、14は須恵質、13は内部が須恵質。22が第二トレンチ第II層出土のほか、すべて第三トレンチIV、V層の出土。本陵の埴輪裾部の出土品と大きな差異は認められない。参考に、須

恵器と埴輪の一部を第7図に掲げておく。

(笠野 毅)

二 開化天皇陵の外堤止水壁設置箇所及び渡堤樋管改修箇所の調査

開化天皇陵の外堤の漏水止工事及び渡土堤の樋管改修工事を実施することになったので、昭和五十一年一月二十四日から二月一日まで、同陵の外堤及び渡土手で事前発掘調査を実施し、外堤では多数の出土品と、石組遺構及び、堀跡状の落込遺構を検出し、各渡土手からは、多数の出土物を採集した。

当陵は、春日山麓の東高西低の台地外縁に位置し、現在南は三条通りに面し、東は念仏寺(通称山の寺)と、北及び西は民家と、それぞれ境を接している。現在の陵形は、周堀のある前方後円墳であるが、文久の修陵の計画図によると、当時陵の墳丘としては、現後円部頂上の円丘部分、山丘状の念仏寺墓地中央に存しただけである。現在の陵はこの山丘状の墓地を墳丘とし、これをとりまく田畑や宅地の低地を整形し、宅地であった西側に築堤して現在の周堀をこの修陵の折に形成している。

調査はこの周堀の渡土手三本に、それぞれを一メートル幅でこれを横断する樋管埋設溝を兼ねたトレンチを設け、西側の外堤には、漏水の涌出口の内側に当る部分に四メートル幅で堤と直交する長さ約六メートルのトレンチを設けて発掘した(第8図1・4の箇所)。

外堤の土相は、堤天端から約一・五メートルの厚さで盛土がある。塊